



学校名:練馬区立南町小学校

氏名: 奥山 さやか

[担当教科:全科]

- 実践教科等:総合的な学習の時間
- 時間数 : 7時間
- 対象生徒 : 4年生
- 対象人数 : 25人

1 単元名

考えよう 外国のこと、見つめよう 自分のこと

2 単元の目標(ESDの能力・態度)

- ・モンゴルの人々や文化、社会について知ることで、世界の国々への興味・関心を深める。
(進んで参加する態度)
- ・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。
(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルをはじめ世界が抱える問題について知り、自分にできることや生き方を考えながら自分の生活を振り返る。
(自己の生き方の追究)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・世界には様々な文化があることに気付く。(多様性)
- ・自然環境やエネルギーには限りあるもので、資源を大切に使う必要があることを理解する。
また、一度破壊されたものを元に戻すには時間がかかることに気付く。(有限性)
- ・世界平和を実現するためには、人と人、国と国とが協力し、共生していくことが大切だということに気付く。(相互性)
- ・開発途上国の問題について考え、今の自分にできることを考え、行動する。(責任性)

4 単元の指導について

(1)教材観

国際化・多様化する社会の中では、お互いの違いを尊重しながら共に生きる心と、自ら考え、判断し、主体的に生きる力を育むことが大切である。日本と似ていて違う国モンゴルで教師が見てきたことを伝え、モンゴルを知ることを通して、世界を取り巻く諸問題を考える活動を設定した。

4年生の段階で、児童が将来取り組まなくてはならないであろう世界的問題(環境・格差など)を知ることや世界で活躍している日本人の活動を知することは、今の自分を見つめ直し「どのように生きていきたいか」を考える上で重要であり、日本人が果たすべき役割について考える素地になってほしい。

(2)児童生徒観

3年生から外国の民話や絵本などを使い「世界の国々」を紹介してきた。外国への関心は高い児童が多い。しかし、「行ってみたい国は？」との問いにはヨーロッパ諸国やアメリカなどを答える児童が多く、開発途上国を挙げる児童はいなかった。外国に興味がある一方で、全く知らない国が多くあり、世界の国のイメージは「何かおしゃれ・おいしいものがたくさん・珍しいものが見られる」等の偏ったものであることが分かった。そこで本単元を通じて、世界の国々には様々な文化・問題・よさがそれぞれあることを知ってもらいたいと考えた。また、人のために何かしたいという気持ちはもっているが、行動に移せる児童は少ない。モンゴルで活躍する日本人の姿から、今自分にできることを頑張ることが世界を変えていくことを伝え、行動に移せるように励ましていきたい。

(3)指導観

前単元「地球を守ろうプロジェクト」の学習では、「小さいことでも、みんなでやれば大きな効果につながる。だから地球を守るために自分たちにできることをやろう。」とポスターを作ったり、プレゼンテーショ

ンを全校放送で行ったりした。しかし、問題が世界規模と大きかったため、なかなかイメージできていない児童も多かった。そこで本単元では、疑似体験からではあるが「実感」しながら考えられるようにワークショップを多く取り入れた。

また、グループ活動を主とし、友達と課題に向き合い、協力して解決していく態度を育てたいと考えた。児童の世界である「クラス」の中で自然に協力・支えあう態度が培われ、将来的に国際社会の中で自然に協力できる人材へと育てて欲しい。

5 評価基準

観点	ア 学習意欲	イ 学び方	ウ 表現 コミュニケーション	エ 自己の生き方
評価規準	モンゴルの文化や世界の国々の文化や生活について興味関心をもって学習に取り込む。	体験を通して情報を集めることができる。	気付いたことや思ったことを進んで表現したり、できることを見付けて行動している。	専門性(得意なこと)を生かし世界で活躍する日本人の活動を知り、今の自分が頑張れることを見つける。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界がもし 100 人の村だったら	・国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差、富の分配の不公平などに気付く。	・ワークショップ版「世界がもし 100 人の村だったら」より、男女・子供高齢者の割合、識字率、貧富・教育の格差についてのアクティビティを行う。
2	協力して村をつくろう	・ワークショップを通じて、世界で起きている貧富の差の拡大について感じる。 ・生きるのに本当に必要なものを考える。	・貿易ゲームを行う。 ・得たお金で村に必要なものを買う。(食べ物・家・学校・病院・車・テレビ等) ・感じたことを発表する。
3	Get to know Mongolia! ~モンゴルとなかよくなるう~	・モンゴルの写真や遊びを通して、モンゴルと日本のつながりを知る。	・モンゴルの位置を世界地図で確認する。 ・クイズを行い、楽しみながらモンゴルの文化に親しむ。 ・じゃんけんや占いを体験する。
4	日本の学校とモンゴルの学校の同じところ違うところを見つけよう	・モンゴルの学校事情を知る。 ・学校にいけないことで起こる負の連鎖について考える。	・2部制や3部制であることを紹介する。 ・都市部と地方部での教育について考える。 ・日本の援助で学校が建てられていることを紹介する。
5	モンゴルでの環境問題は?	・日本とモンゴルでの環境問題について考える。 ・日本の支援について知る。	・フットランゲージの活動から日本とモンゴルの環境問題について考える。 ・自然と共存してきた生活様式を紹介する。 ・環境問題に関係ある日本の支援や企業の活動について紹介する。
6	絶滅した動物にもう一度会えるの?	・モンゴルが取り組んでいる野生復帰プロジェクトや動物園の役割から、自然環境を守ることの大切さに気付く。	・モンゴルの野生馬タヒと家畜馬を比較する。 ・モンゴル国立公園で行われているタヒの野生復帰プロジェクトを紹介する。 ・飼育員やボランティアの話を聞き、動物園の役割について知る。
7	世界で活躍する日本人	・海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知る。 ・今の自分にできることを見つける。	・モンゴルで活躍する日本人を紹介する。 ・モンゴルで日本人が努力することが、どのような成果を導いているのかを班ごとに考える。 ・自分を見つめ、これから自分の世界(クラス)をよりよくするためにどんなことができるか考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【世界で活躍する日本人】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月15日(火)第4限

(イ)実施会場 4年2組教室

(ウ)本時の目標

- ・専門性(得意なこと)を生かし世界で活躍する日本人の活動を知り、今の自分が頑張れることを見つける。

(エ)指導のポイント

- ・人と比べることなく、自分が得意なことを生かしていけばよいことに気付けるように、様々な専門性をもつ人材を紹介した。
- ・協力して課題に取り組めるように、グループ活動を設定した。

(オ)本時の展開

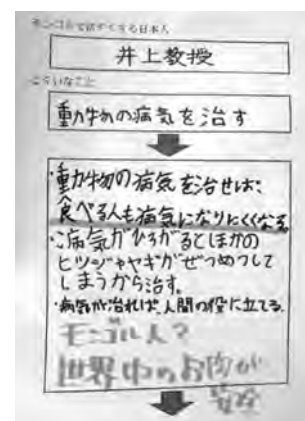
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 7分	1 モンゴルで活躍する日本人	・モンゴルで活躍する日本人とモンゴルでの問題・現状を知る。 【医師】地方での医師不足 【獣医師】家畜の病気の発生 【建設】新空港の必要性 【教師】日本語教育が盛ん 【環境教育】ゴミ問題 【バレーボール】指導者不足	一斉	・4年生児童が理解できるように、簡潔に説明する。 ・親しみをもって考えられるようにするため、写真と名前を提示する。	学習の様子 発言
展開① 15分	2 活動成果	・モンゴルで活動することで世界にどんな変化をもたらすかを考える。 児童の反応例 【医師】 →医者が増えて、みんな健康になる →新しい薬が開発される ・グループでの話し合いの結果を発表する。	グループ 発表	・1つ例を示すことで、活動イメージがもてるようにする。 ・様々な意見が出るようにグループでの話し合いにする。 ・話し合いが止まっている班には、助言をする。 ・実際とは異なることや、内容がずれる場合には訂正し、事実を伝える。 ・わかりやすく発表できるように、発表用のワークシートを準備する。	学習の様子 発言
3分	3 国際協力の必要性	・全グループの発表からモンゴルで活動することがどう日本と関わっているかを考える。	一斉	・人と比べることなく、自分が得意なことを生かしていけばよいことに気付けるように声をかける。	学習の様子 ワークシート
展開② 10分	4 自分ので きること	・世界(クラス)がよりよくなるために自分ができること(得意なこと)を考える。 ・学習を振り返って、思ったこと・考えたことなどをワークシートに書く。	個人	・発表したい児童がいれば、時間をとる。	
まとめ 10分	5 学習を振り返る	・発表する。	個人 発表		ワークシート

(2) 授業の振り返り

児童は積極的に授業に参加していた。本時までには少しずつ紹介した方々に対して親しみを感じていたことが、本時で新しく紹介した方々についても考える力に変わったと思う。しかし、伝えたいことや児童に考えさせたいことが多すぎた。本時は2時間に分けてじっくり考えられるようにしたほうが良かった。友達の良い所を見つけるのが上手な子が多い一方、自分のよさを認めるのが苦手という課題も見えた。今

後は、自分のよさを感じられるような学級にしていきたい。

(3) 使用教材



日本人の活躍でどんな変化が起こるかを考えまとめたワークシート

(4) 参考資料等

- ・NHKエコチャンネル <http://www.nhk.or.jp/eeco-channel/>
- 「『世界最悪』モンゴルの大気汚染」 2014年1月30日 放送
- 「モンゴル大気汚染改善へ 煙の出ない石炭を」 2015年4月28日 放送
- ・『ワークショップ版・世界がもし100人の村だったら』 開発教育協会発行(2003年)
- ・『新・貿易ゲーム-経済のグローバル化を考える』 開発教育協会・神奈川県国際交流協会発行(2009年)
- ・『現代モンゴルを知るための50章』 小長谷有紀・前川愛編著 明石書店(2014年)
- ・『国際理解教育実践資料集』 JICA地球ひろば編集、埼玉県立総合教育センタ監修(2014年)
- ・資料: JICA「学校に行けない世界の子どもたち」
- ・研究レポート「CURRENT STATUS OF RE-INTRODUCING PRZEWALSKI'S HORSE (EQUUS PRZEWALSKII Poljakov, 1881) POPULATION IN HUSTAI」
Dorj: USUKHJARGAL(FIELD BIOLOGIST OF HUSTAI NATIONAL PARK)
SUPERVISOR: Professor Namkhair BANDI (2014年)

8 単元をととした児童の反応/変化

- (1) 国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差、富の分配の不公平さに気付く。
 - ・世界で文字が読めない人が20%もいることにびっくりした。薬か毒かわからなければ、飲むこともできないからとても困る。
 - ・恵まれている人と、すごく苦しい人との差がすごく大きかった。
 - ・貧しければもうあきらめるしかないと思った。(役割で最貧国になった子の感想)
 - ・僕の班は1つのチョコを4人で分けなければいけなかったけど、隣の班はお皿に乗り切らないほどあった。これが世界の貧しさか…と思った。
 - ・同じ人間だから不公平はなくしたい。
 - ・富や教育の差が大きい。
 - ・豊かな国だったら貧しい国に分けてあげたかった。
 - ・食べ物のない国の人たちはどうやって生活しているのか、気になった。
- (2) ワークショップ(貿易ゲーム)を通じて、世界の中で起こっている、貧富の差の拡大について感じる。
 - 【資源も技術もない村】
 - ・製品を作ろうと思っても、定規がなくて困った。途中で、先生から10分だけ貸してもらったときすごく嬉しくなった。
 - ・定規を紙に写しておいたので、その後も定規として使うことができた。貧しい国になるほどたくさんの知恵が必要。
 - 【資源がある村】
 - ・はさみや定規がなかったけど、他の村から道具を交換しながら村を発展させられた。

- ・隣村の定規がうらやましくてため息をついていた。途中から隣村と協力できたので、家を建てることができた。
- ・紙が(資源)がたくさんあるから大丈夫だと思ったけど、最後はとても困った。もっといろいろな所に借りに行けば良かったと後悔した。

【普通の村】

- ・最初に渡された物に文句を言うのではなく、他の村と協力しなければいけないということが分かった。
- ・裕福な村がお金や道具を貸してくれたり、応援してくれたりした。村が貧乏でも皆で協力すれば、皆が裕福になると思った。

【裕福な村】

- ・途中から差がけっこう広がってびっくりした。お金がいっぱいあったので、寄付しようかと思った。
- ・ワークの途中から差が大きくなっていった。世界もこんな感じで発展している国とそうでない国とが分かれていると思うから、発展している国が支えないといけない。

(3) モンゴルの写真や遊びを通して、モンゴルと日本のつながりを知る。

- ・友達にモンゴルの子がいて話も聞いていたから知った気でいたけど、まだまだ知らないことがたくさんあった。
- ・きれいな高層ビルがモンゴルにあるなんてびっくりした。
- ・ボーズを食べてみたい。
- ・未来は日本みたいになるのかな。
- ・もっとたくさん知りたい。
- ・モンゴルが大都会だとは知らなかった。
- ・馬頭琴が本当に馬の鳴き声に似ているのすごと思った。
- ・5年生から外国語活動が始まるけど、他の国のことも知りたくなった。
- ・モンゴルは貧しい国かと思っていた。でも豊かな国なんだと思った。
- ・あんなに動物がいるのに、動物園がないことに驚いた。
- ・ラクダやヤギの乳を飲んでみたい。

(4) モンゴルの学校事情を知り、学校にいけないことで起こる負の連鎖について考える。

- ・モンゴルの人口の半分が首都に集中しているのが驚いた。
- ・私はいつも学校に通っているのに、通えない子がいるということがとても悲しい。
- ・普段通っている学校がこんなにも大切なものだ勉強を通して知った。
- ・学校に行けることがこんなに良いことを学習した。
- ・モンゴルに55校も学校を建てたのはすごと思った。
- ・モンゴルの人たちは日本のことをたくさん知っているのに、私たちはモンゴルのことをあまり知らないのももっと知りたくなった。
- ・大人になったらモンゴルに行って友達になって日本語を教えたい。
- ・学校をつくってくれた日本に感謝しているという話を聞いて、私も将来、他の国の人を支えられるような仕事がしたいと思った。いろいろな国と日本を仲良くしたい。
- ・モンゴルはこれから技術が発展していくとともに、学校も増えていって豊かな国になると思う。

(5) 日本とモンゴルでの環境問題について考え、日本の支援について知る。

- ・日本の清掃車が使われたり、煙の出にくい石炭を作ったり、清掃工場をつくったりと日本の会社はとてもすごと思った。モンゴルと日本がこんなに関わっているとは思わなかった。
- ・ゴミを拾う仕事があるなんて知らなかった。
- ・ウェストピッカーの中に子供までいることがショックだった。
- ・日本はけっこうすごい。だからもうちょっと国内の問題も解決すればいいのと思った。
- ・リサイクルゴミ箱があるのに使わないのはもったいない。
- ・遊牧民のときはエコライフを送っていたのに、今はポイ捨てが多いのはどうしてだろう。
- ・骨を遊び道具、肉は食べ、フンや毛はゲルに使い、動物の全てを使う工夫がすごい。
- ・動物を無駄にしないようにしているところを日本は見習いたい。
- ・ゲルでの生活を見習ってエコライフをして環境を守りたい。ゴミの分別の大切さが分かった。
- ・廃車が他の国で使われる方が解体されるより環境に良いのではないかと思った。
- ・モンゴルと日本以外でも、国と国で支えあって世界を平和にできると嬉しい。
- ・青年海外協力隊に入りたい。

(6) モンゴルが取り組んでいる野生復帰プロジェクトや動物園の役割から、自然環境を守ることの大切さに気付く。

- ・モンゴル人は絶滅したモウコノウマのことをとても愛していたことに気付いた。一番大切なことは絶

滅させないことだと思った。

- ・いろいろな人が協力して現在は 300 頭以上だと聞いて、やっぱり何事も一生懸命努力しなければできないということを今日の学習で学んだ。やはり自分に関係なくても地球上で一つの命がなくなるのは悲しい。
- ・モウコノウマという馬がいたことは知らなかったので、絶滅したことも、ヨーロッパやモンゴルの人が頑張っていることも知りませんでした。見た目に反してすごい馬で少し驚きました。
- ・問題が起きていることを知って考えることが大切。モンゴルの人はずごい。悲しんでいるだけでなく、モウコノウマを取り戻そうとして行動している。
- ・日本のトキも戻るといいな。
- ・絶滅したものをもう一度取り返すのは、きっと無理だと思う。
- ・モンゴルで絶滅している馬を復活させる人がいるから感動した。
- ・いろいろな場所でいろんなことをしてモンゴルを助けていることが分かった。
- ・最初はモウコノウマの写真を見たときは「弱そう」と思ったけど、本当は強くてモンゴルの人に愛されている馬だということが分かった。人が乗れないほどの強い馬だけどモンゴルの人たちにとっては大切な大切なたからものだったと思った。一度モンゴルでは絶滅したけど、いろんな人が助けて今では300頭以上になったのは、モンゴルの人々の強い想いとほかの人たちと助け合っているからだと思った。動物も人間と一緒に会えなくなったら悲しいということが分かった。
- ・初めはモウコノウマのことを家畜と思っていたけど、すごく大切な野生の馬なんだということが分かった。モウコノウマが絶滅しても、また復活させたいという人が頑張って復活させたことがすごい。
- ・ホスタイ国立公園の人や東京動物園ボランティアーズの人たちは必死に絶滅をとめようとしていることはすごいことだと思った。

(7) 海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知り、自分にできることを見つける。

- ・世界がよりよくなると幸せ、笑顔が増えると思う。もっと笑顔があふれる世界になってほしい。
- ・「人に役に立つこと」は必ずあると学んだ。
- ・それぞれ自分の得意なことを生かして、力を発揮しているので素晴らしいと思った。
- ・横山隊員みたいに世界で役に立ちたい。
- ・日本のことより世界のことを考えている人たちは素晴らしいと思った。自分の得意なことを生かして活動している人もすごい。
- ・みんな得意なことや好きなことから世界を変えているので、小さいことでも何かやりたい。
- ・井上教授の言葉から、同じ人間だからこの人が上この人がしたとかはやめて、みんな平等だといったと思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果] ・児童は世界の中で起こっている問題を、自分たちなりに真剣に考えることができた。

- ・活躍する日本人の活動から、誰かのために何かをしたいという気持ちをもつことができた。
- ・自分の生活への感謝の気持ちをもつことができた。

[課題] ・伝えたいことが多すぎたり難しすぎたりするので、精選する必要がある。

- ・年間指導計画に位置付けられていない授業のため、時数を確保することが難しかった。「青年海外協力隊の人を学校に呼びたい。」「モンゴルの人たちと話してみたい。」などの希望が出た、児童の願いを実現・実行する時間の確保が必須だと思う。
- ・学校の中での情報の共有の仕方。

[改善策] ・児童の成長段階に合わせて授業内容を設定する。

- ・年間指導計画の中で位置づけをして、系統的に授業が行えるようにする。

10 教師海外研修に参加して

授業後の児童の感想に「だれが上とかだれが下とかではなく、みんなが協力すればきっと世界はよりよく変わらと思う。」という記述を見たときに、心からこの研修に参加して良かったと思った。研修に参加する前は、どうしても日本がモンゴルにして〈あげて〉いる支援というイメージが自身の中にもあり、どうやって児童に伝えようかと悩んだ。しかし、モンゴルで共同研究を行っている帯広畜産大学の井上教授とお話しする中で、モンゴルと日本の関係は支援国と被支援国ではなく、協力国だと確信することができた。今後もこのことを伝えていきたい。また行動に移したいと考えている。

また、他校の先生方と意見交流できたことも大きな成果だ。同じ場所に行き、同じものを見ても意見が違う。しかし全員が「児童に伝えたい」という気持ちを持ち、真剣に話し合った。研修が終われば別々の学校に分かれるが、これからはモンゴルチームとして開発教育や国際理解教育に携わっていきたい。